

月刊

地域保健

1
2012

●新春座談会

被災地の復興に向けて

●フロントランナー

前野さゆみさん《摂津市役所保健福祉部》

●ピープル

堀越栄子さん《日本女子大学教授、ケアラー連盟共同代表》



前野さゆみさん

● 摂津市保健福祉部保健福祉課課長

無理をしない、できることを一歩ずつ

「その気」にさせるグループづくりの配慮と戦略

大阪府摂津市



ひんやりした空気が漂う晩秋の午後、阪急電鉄摂津市駅前は人影もまばらで静寂に包まれていた。石畳を敷き詰めた東口広場はきれいで整備され、建造物も新しい。総ガラス張りのユニークな形状の建物が、目的地のコミュニティプラザのようだつた。

館内に入ると外の静けさがウソのような喧騒と活気が押し寄せてきた。関西弁の飛び交うロビーは人波で埋まり、舞台の上ではオレンジ色のTシャツ姿の集団が『三百六十五歩のマーチ』に合わせ健康体操を実演していた。客席にも、舞台の動きに同調して手を動かしている人たちがいる。

プラザで開催されているのは「せつづきいき健康づくりグループ交流会」。市内34の健康づくりグループが一堂に集まり、日ごろ実践している体操などをお披露目するという。参加者のほとんどは60歳以上とのことだが、ライフガウスのような熱気と賑わい

だ。

グループのリーダー的立場にある

「生き生き体操の会」等を育成し、今

日の隆盛にまで導いたのが、保健師の前野さゆみさんだ。同会の中野一郎会長は、「ときどき差し入れをしてくれたり、休日返上で応援してくれたり、グループが今あるのは前野さんのおかげ」と評価する。前野さんはどん

看護師から保健師へ

前野さんは熊本県の出身。からだを動かすのが好きなこと、祖母の入院で看護師の働く姿に刺激を受けたことから、高校時代に看護の道をめざすよう

保健師なのか。プラザ内の別室でご本人に話を聞いた。



摂津市駅前のコミュニティプラザ



新春座談会



日本赤十字秋田看護大学

佐々木亮平さん



東松島市

大内佳子さん



厚生労働省東北厚生局

望月聰一郎さん



厚生労働省健康局総務課保健指導室

石原美和さん

●司会●

ほとんどの避難所が閉鎖され、被災地での保健師活動の局面は仮設住宅支援や新たなまちづくりへと移行している。
今、被災地で生じている課題は何か。解決するためには何が必要か。
被災地ごとに状況が異なり情報がばらばらのなかで、情報を整理し方向を見いだすことを主眼として、4の方に話し合っていただいた。

※ なお、福島県は放射能汚染という別の問題があるため、今回は対象からはずしている。

写真：Sei Kamiyasu

被災地の復興に向けて

震災を乗り越えた ひよこたち

1年目から「非日常」を経験して

やなぎばし ちさと すがわら ますみ
柳橋知里さん 菅原真澄さん

●東松島市保健福祉部健康推進課



東松島市矢本保健センター



▲柳橋さん（左）と菅原さん（右）。震災の日の前線基地となった保健相談センターで

取材・文・写真／西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

海に近い住宅街にはまだ漁船が横たわっている。辛うじて姿を残している住宅も、1階部分が大破。地面はぬかるんだまま泥だらけ。がれきを積んだトラックがひつきりなしに走っている。

東日本大震災から6カ月半が過ぎたある日、津波により住宅地の65%以上が浸水した東松島市を訪ねると、冒頭のような風景がまだ残っていた。仙台から石巻を結んでいた鉄道、JR仙石線は東松島市内で切れたまま。現地に向かう足は代替バスかレンタカーしかし、復興のためのトラックと移動のマイカーで国道や高速道路は渋滞も多発している状態だった。

そんな東松島市でも、震災を乗り越え頑張つているひよこさんがいる。菅原真澄さんと柳橋知里さん、ふたりは共に平成22年度採用。つまり、1年目が終わろうとするときにこの震災に巻き込まれ、普通のひよこさんでは有り

れない環境のなか、震災対応に奔走してきたのだ。まずはひとりずつ紹介しよう。

養護教諭になりたい

菅原さんは岩手県花巻市出身の25歳。3人姉妹の末っ子として育ち、中学生までキャビンアテンダントに憧れながら、勉強と部活のバレー・ボールを楽しんだ。高校は地元の普通科進学校に進み、今度は弓道にチャレンジ。このころから少し将来への夢が変わり始めたようだ。

思い浮かんだのは養護教諭の仕事だつた。自分が優しくされて気持ちよかつた思い出を、そのまま仕事にして、将来の子どもたちに返してあげられるようになりたかった。気持ちが固まると実際に養護教諭の先生に「どうしたら養護教諭になれるのか」「どういう学校に行けばいいのか」を聞きに行き、自分の将来をそこに重ねていた。



▲高校では弓道部に所属していた菅原さん